



瓶下起之巻

三編

13
2853



八13
2853



新下葉

如久貞
如改系

三編採

三〇

へ13
2853

都下むき記巻の上

序

あふゆきとつてあが又二二三のほの五つむつら一は浮世成り七のま
はらぬしうを便よをれ九のまはた業十人の麻多まじりた歎かし是
らの流成物語りにあはれすと云ふをまことほかんで一日のあつと境より
やうまきなりは雲気同志の目けもろし論れが伝達しを老人をさ
身をまよふの権はけ巻の昔より心をまよしお生乃ねと竹との節り
まよひしは寝か若ひの肩よりひたは白雲のほのまよひ月より深
の権はまよひ海老藪捕子 福業仲名の物語はあつてまよひ乗しを
うち乗がくまめしとまよひる女でもあつたり若かりは唯し世の中
そのまよひはまよひたより権は密伝交は傳も欲ふなりは流成
と権坊はまよひ人あつたりまよひるまよひるまよひるまよひるまよひる

故
横山有策氏
昭和四年五月
寄贈
新
金
田
印
書
圖

とほとどら何れもいふは語らむをいふりさきんをいふく
拙ぐのち中よりいふは欲無ん吾をいふもいふく人
らづりあすも業花の若もさえての後の花も一時はあ

春乃夏蝶此一眠

作去ふ

ほつせん

家小年久しと松と常盤の久松所ほより信玉も廣く古悪る物
本結れをく高のい大商人あり名は松松を昔高とて代く流し居
亦あり未婦は申すまじく下くと悪婦はくふも但せし身なれ
どもゆり花葉さるあまのまも早の五の六の妻も三十一は三つに
女も子といふものなく任せ兼さるむの中さとかくいふ小成り
金銀とあまの角所あさるものめをむけらば昔高が地面
の肉小あまの道を浪人めて人あも候しうぬ若き主婦いふ小若
氣のあまあてあえとつちぬ形めて二人はれあもなると迷む
事と少しはあづと依りに波浪人の妻と琴此所通として一
月立二日五月目もあづ波女房とあるぬあまを月とらて
あづあるる男まか生しなる不被浪人も未だあまをいふ

親類ともなく妻の産後の徳を母についに成す力有り
と善せし書不別を水子の昔育誠小目も尚かぬぬるる不又
と之流人も大福小野い付し故物忘れ少く彼善き徳を地色の
中汲き中を内しける故日に情少くまは押収す後ふといはく
小世話をし我か下女も男とありて女抱し彼女子も家内へ
言多小れ母を抱きひらる故小力にくも念づく中列るる
是ぬ善き此風ゆき彼流人も故中にも大福と成り今も流し忠の
善の親の息の下より善き徳に向ひ抱くや善美の流流あて初
あせむにぬるるゆき世分の因縁なりわ私も昔ハ言のきま流の二平
も持せし身なりし不先の女房と同ド氏士の娘なりし小人易
くまら申あて抱やし行通ひしと父母の目よりすわ私ととも云
の女房もあり先立し書も私身乃あり身と持て善氣の徳先の

考へなく五年経よう保くたぐし不吉也あ方より婚礼といを
がれて仕方なく二人死るんと善徳の抱く母の情あてけけ子
立退しがあ方の親くの親さ二つあを居るぬふ妻はあ方の息
天尼のなつと徳女房といひあともたなさを離れ遠去の大となる
こと三つあをたましく生とあて来りし子を夫の急しきも成る故小
思くの流流物はあをにてけ私かお世話をしりなりしと心な流
流き流るるゆきとも我命を因夕かせゆりし身笑ひ念ひあ
ともとも親の罪と初来るとも善きも有ましとそののりには
何ともなくあかきなりし記めてあ子の初来を備へし流流しり
をを念せるるついにあむるしぬりし流善き流もい流ふあいまより
伝るるとも念に吊るし初るる月目立て彼あ子親をなげけしとを
だつともあかきとあかぬぬあ親の流しきもあ世に玉の流るる

そよ小流不流の種とてつる若生れぬ善き湯去婦に一白の湯も
おいて大切小育て我年月子とりつれおなくお細くおあまの
水子と育つと神仏の引合心あておしお流りしものたりとま
表向き秋子と拙者して名を拙次郎と唱て大切小育て秋
葉一けり物又そ後女房に侍女とまかりおると唱て十六夜に成り
しが主人長き湯は湯のたふさきと付しお折や一女房の熱
切糸と連て親里へ泊りけけお折るものつれぐ二夜二夜と戯れ
くして後小身拙小ぬ一ぬかんとおもたりぬ女房小つてさう語り
我け年三成て参りて二人なくぬり書一書候もる一ぬぐり成
りたぬれども一生の内二度の出本人祥しぬ何とをあはせし成
らそらうこの子と心ひ育てお折糸の糸候お依と定めてもの
りおんぞん小くおとらべしとおとる一書候も老くよりおとる

しき女房のりゆり目出度といたし候し候し候し候し候し候し候し
海しゆのぬれ候とらさおちが候しゆかせるしたるがぬ産の子と
拙者して育て参りてぬしぬしぬしぬしぬしぬしぬしぬしぬし
し小今おとすも身柄を痛めぬお人の子とつけしとぬ美
候いと操ぬし女房あまよりちて侍女おちと大切小育子のぬ小
軽夕いそよりぬそでの二夜の妻目出度五のぬるる男子出生し
りりまより善き湯か斗いぬておちとぬる田舎の大空のぬ嫁を
て出生せし子とぬさ下と名をま婦の中むりまぬ梅橋と二人
の子と親書して書あはけてぬ人の子と大切小育てけり一子光
陰年のごとくおちもぬて十八夜をて十六夜に成りぬれも互流の美
妻とけてぬてぬ紀伊島や大方をぬとぬさせしぬぬてぬぬるる
るぬ一とぬ十ヲ知り十四五の時より徳とぬる表向湯の

くりき人まはさる 倭びたりける上巻ゆれそわ世に老の中おもある
るまといわかすてすれ蒼てふとあられとわ人少膝を仰くし世男の人
をいふ小なるまが二程のほじか内の子き何や豆大よし別して母を
何れも我差し子小もあらざるして初る子ともあけしと目に信んし
なむる易子母神の作後とねも母の姪お紐とて高由十二文小なる
姫宮量いひかしの小所うりはぬ者士のかき蛇ともいふ知せて心立や
さしき婦もましや少て舞とて初と互味き人殺あぬも嫁小や
のさや便成りゆととまおねるへ嫁小きんと紐束したりし紐わゆる
洵りおもあらる級也きと末と糸物と装のと死成人と原氏ら其の
初りふ知小人のゆふひ言しける初なる也き初一もあお紐も
十にやなぬりし級宮もけさう唱あて表美く婚礼とせん久叔
町へ唱あてさし級も移れと初ら世にきいひて改よとさうき

も也き帯が母は初が尻のん化と打外して一日二日とおひの外も
むづろしく今も命も決らんと若く一氣成風情を懸き帯にぬきさる方
たくく束帯とも小お紐と二人をさしぬ抱きる母を産まき抱きよて塔と
と退びけぬ帯斗りよと一男一抱き油くと遠く去りて也き帯子珠を
若き帯主婦はみふあはまといあゆとあし初り長き一は珠の子と
いふる言帯成ことを知りてあて懸き一帯を懸くの正物初りあて子
あてなき初と世に帯の正物あたりあや成初小冥子を産まれ
は身代と下さねんととの正物あいつのめつりの目も正物を送てむは
度のゆち初小一日の巻もきさすとぬか屏のどく款きけぬか初やく
契一帯実の子ぬともは上の巻あきむつふ小一巻もをむましと
も長巻巻といひ長巻といひ又とあはも一き今あは身小初を
あはあはめりもあははめりもあははめりもあははめりもあははめりも

素ぞ如く十にのみぐらんせるはれはゆと昔治部が安んずる今と
臨てぬ是等と代人のましくめておれたるは子をもつる子
あらむとしが為をよみ目もくもせかし又昔も浦原ふか仁道とい
づれとちうねてお供はさんかともそらら思も昔治部りてまお
とちうほまりいおれども一十月をうら孤子と家もふ育し被家子
うてふ供ふあつあつと海を遠きとるおり心の死を驚く考
く昔治部を心後とるひ方切ふしてお能とも中よく主婦と成り
り来目あつて我を死能は千石斗の志もどつてふ其の舎
其目こまくと云獲りはふおむるし成りり其治部ふけて歎きふ
あつこお能も他母のよ致し一白歎き昔も三年に年ひるト
も深き世を別れともふ死とまよと歎きなるが侍るくね生祀也
海下りく小治部の安んずるたりちる初る馳きのおくと昔治部

を差を凌田舎一斤付しおちもは死ま小別れ能は其申のり致
命一斤付しあも昔も年も三十四五のり致と恨能といふ致其の
りともあり致南方の月久松町一ゆり病なるがも一授ふ大がつま
あくそ上昔も昔も毒も別れ能也淋しくを泣かせ世方のりあ治部
昔治部ふ任せと臨病のり持して病ける致音ひのりとおちと又
く手うけふして去るお目と一休と先立一毒の目報もとる治部
昔治部ふか家実のり昔治部ふか身代をやりくもておちか女ん
の凌りく深き為を夫し一は別れ遣のりいふれて急角お家の子
と家とくを懐りてお能を家子の婦小治く心の月小治く思も昔
として病る親小細ぬるお急をちりあを祈る懐一はるる人を往
治部一昔治部るれが今と母の懐一き上小治部其治部
あつる懐りぐまなともるのりしおは病の昔治部も十八歳と成て好

色の生れを致お細が貴く一可き下し記に宛ぬ往來の何とを是を
題おし我は致を致お細を女房申せんとん小名い振付けばこそ名を
惣三郎の縁照する致とふんて是をよけ往母の遺言ゆては家の血
脈小あゝぬとぞ知りて何れとぞいおと昔は弟小僕りてゆりなむ
まふお細小まけるく事い一向小物もまごお振る致お細小飛んま
一まふにお三郎とま号といふ致お入申んを何彼お方の氣をうぬ
て保切小ま多致惣三郎もん小保くの老もまごも我は致お小
る不致もなき小るま中保を結びて記一龍んよりつれるくして我
小老おをつりして何とぞ告三郎と夫婦に成ふ父もお徳昔は弟も
一三郎といふんと老おのを多知小邪よひん名小まればもお細お少くも恨ま
伯父のまけのお方の邪兄やうゆままを陰小成日向小成り惣三郎と大
切小ま多致惣三郎の父とぞ思くまごも人も人小笑やうさせて首尾よりく

家と様見といひ致は細いあよ列整泊と若女弟を買て内小とて
斤射も振む今日を若原あすの保川と致く夕中を泊りしに成て
今お家内の老もあまされてまごもまごといふ人申り之誰を人笑んま
人もるくまごも老て妻に成り致お細の親里に何とぞまご二月にハ
婚れをませんといふとまごといふ急いが小かんまんの惣三郎と致くくおまもい
お細を人との面がりくお親里に陰小成日向小成惣三郎の機嫌と若
いともまごといふまごも惣三郎の機嫌まごい分をまよ列く之告三郎の目には
み小惚れて何の事い人なま時かまとなりく人の大を志りくとま
せ目であつてもお細小一節小惣三郎と大切小していり小も告三郎とい
たりまごといふまごもまごもたなくつりまごもまごも今りか正月二日
まごもまごも父の登り小をまごも直娘まごもあつとまごのお方の
お小上下と何とぞやり振りら惣三郎も老ものまごも整て振らお細ハ

情緒のゆくり種々おぼのしめたる下すなりかき集りし節とて想て
 は其日のと共やぢやせとて麻^た美島那さん^のよつお下り^しとておませ
 ん^のい^つやごま^りり^つを^おま^をり^ると^お風^をな^まさ
 て^おお^の風^を引^くご^のめ^いご^らを^おせ^ると^おま^をり^るは^なま
 毛^は二^つ小^おお^もも^もでも^なま^ませ^いだ^よと^いふ^うら^せあ^つち^の一^つへ^り
 せ^てあ^つち^の面^を倒^すと^えら^らふ^らと^引た^がり^白く^まき^人意^をな^め
 お^にお^をり^くと^して^ほ中^をや^うく^お能^をい^ちか^へて^長る^うの^お上^りを
 上^へて^のり^やあ^るさ^おと^たを^せと^もい^ろを^おま^をり^るふ^むく^くお^よお
 くり^にて^遊歩^のお^能れ^たを^すの^身て^おま^をり^ると^又そ^おま^をり^ると^とお
 一^さ梅^りほ^いれ^た希^をま^よひ^のん^根と^想二^三糸^のお^能れ^たと^表向^か
 ま^もも^情を^ああ^らく^なお^く下^まを^よこ^さお^のろ^をと^咳く^くお^よお
 が^ゆら^まい^が氣^の白^濁す^だ共^物と^操業^へ入^ると^一活^ちん^んん^と

思七^七子^子のおお^お織^織とはい^いの^し紋^紋を^入ま^しと^よま^りま^うら^し
 そ^お氣^がな^まれ^七子^子の^ち一^一筋^筋が^あく^くの^のち^らせ^七子^子筋^筋を^入め^ら
 う^おく^入筋^筋を^せお^ちり^てと^上下^の紐^紐を^ひく^とと^て筋^筋を^持て^ま
 ち^て筋^筋を^はく^く筋^筋を^まよ^いて^もえ^よう^にお^お能^れの^とや^う白^く
 持^持ち^お能^いく^くは^はれ^るく^され^ても^かり^も筋^筋を^もと^とお^しく^くと
 去^去風^風を^まじ^く筋^筋を^まち^の縁^縁に^あめ^くて^筋筋^をま^まり^はる^とお^お能^れの^とや^う白^く
 三^三糸^糸を^おま^をり^こる^と一^一糸^糸を^まよ^ひに^おお^能れ^のと^やう^にお^お能^れの^とや^う白^く
 一^一糸^糸を^おま^をり^こる^と一^一糸^糸を^まよ^ひに^おお^能れ^のと^やう^にお^お能^れの^とや^う白^く
 糸^糸を^まじ^く筋^筋を^まち^の縁^縁に^あめ^くて^筋筋^をま^まり^はる^とお^お能^れの^とや^う白^く
 て^おお^の筋^筋を^お能^いく^く筋^筋を^まよ^いて^もか^りも^筋筋^をも^とと^おし^くく
 お^お能^いく^く筋^筋を^まよ^いて^もか^りも^筋筋^をも^とと^おし^くく筋^筋を^まよ^いて^もか^りも
 お^お能^いく^く筋^筋を^まよ^いて^もか^りも^筋筋^をも^とと^おし^くく筋^筋を^まよ^いて^もか^りも
 お^お能^いく^く筋^筋を^まよ^いて^もか^りも^筋筋^をも^とと^おし^くく筋^筋を^まよ^いて^もか^りも

て居る初と申す所の親類の人を誅せられ退かされるを待つて居るゆゑ
然と人目小う私小三日より七程まで居つてけとて七程の暮る小
がうくと私小おて私おあるお舞の「マヤ」久松町の兼良那今も
そととお學まきと申す私り糸と先々おまおめてとふ「カ」と「お」
内之「お」今ありととお遠ひ小まあるとて髪と襟ひ小ありま「とこ
と久さんのとり」いつておさん小若良那が今お仰りだともおりて允
るとしおあ「平」自私居ハ階級毛袴の大とてその「一」控の目録りの
為り種ひちりおん藤子の平ぐけと横テ与ふメておくこれ「さ」度と
ちも「あ」ちけておさのち私とをさしてとよおの料理業おの小女ぶ「う
く」おが「あ」おとくどん「タ」ハ緒おせさる柳橋のまると「表」中「約
て」私と「お」おさん又ス「い」おん「ご」「ま」り「ま」らぬでもあれ「お」ぬま「つて
私」軽「く」喚まてて「め」の私「が」目小「お」を「あ」ら「ま」す「け」「ま」る「お」り「こ

さん小「つ」おて「あ」り「あ」い「い」よ「い」つ「お」て「い」く「ま」り「さ」「義」を「あ」る「お」お
と「あ」つて「女」房「よ」ま「あ」ま「お」に「い」よ「あ」く「お」る「せ」る「麻」り「い」お「う」と
「お」お「お」ら「う」一「雨」い「い」よ「つ」ち「ア」ヤ「お」さん「お」い「お」ら「う」お「お」
む「ご」い「ひ」く「い」お「ら」お「の」ま「と」つ「ら」ま「て」目「の」お「あ」る「お」お「ら」ま
さん「ご」も「お」さん「が」お「は」は「ま」り「して」成「中」を「ん」ち「つ」と「お」つて「お」さん「る」せ「
かん」さん「一」か「ま」ご「年」が「い」ぬ「こ」「ま」あ「ら」ま「い」お「だ」け「る」お「又」さ「年
が」い「ぬ」た「ん」ご「と」お「い」い「よ」お「お」お「又」た「の」お「ん」の「い」ひ「ら」う「お」
「怪」い「よ」お「さん」く「ご」お「お」ら「い」ち「目」を「ご」よ「お」く「い」お「ご」よ「お」お「さん
ま」で「同」一「お」お「さん」ご「う」「こ」ら「お」を「あ」つ「て」ま「ご」ん「お」く「よ」お「う」
料理「お」さん「お」さ「ふ」い「お」さん「だ」よ「い」よ「ち」く「せ」る「お」お「さん」
を「で」ま「て」私「ら」を「あ」る「お」け「る」お「あ」や「ら」ら「ち」が「ま」あ「い」ひ「お」
「お」も「お」も「あ」り「お」ご「ま」を「お」り「ま」ら「ら」ぬ「ち」が「三」月「お」お「ら

連していつて女房さ^ハ浦山^ハの女房よりしてどあそか^ハ二十日の風よけ
あきと終り大笑いして彼女小侍^ハの事といひ付てやり笑の二重の
たまふて細子^ハ舟の茶火^ハ砕つたつちや龍の舞がんとあつたつち
の身^ハもあ^ハお二市^ハはは五の細小あらん小あたりて舞^ハ功^ハのま^ハ舞
ころんで舞る表の入りよの陣子小舞^ハあて舞の危と大き^ハ去^ハ上りは
よ^ハ大籠^ハ若の上小枝^ハ若のま^ハと舞て存^ハ子^ハ若^ハ外^ハのま^ハ目^ハ扱
ま^ハま^ハ切^ハな^ハとあ^ハつ^ハま^ハ小^ハ積^ハま^ハね^ハお^ハ細^ハ子^ハ小^ハ葉^ハが^ハま^ハの^ハつ^ハる^ハの^ハあ^ハあ^ハ
とみ^ハが^ハひ^ハて^ハ長^ハも^ハ二^ハ三^ハ人^ハあ^ハて^ハ飯^ハあ^ハく^ハと^ハして^ハ長^ハる^ハ女^ハ房^ハお^ハ然^ハる^ハ浦^ハ野^ハ活
の^ハあ^ハま^ハま^ハま^ハり^ハ下^ハ志^ハは^ハ結^ハ業^ハ平^ハぐ^ハと^ハ葉^ハ平^ハの^ハ中^ハ野^ハあ^ハの^ハ端^ハだ^ハ
の^ハあ^ハま^ハり^ハ花^ハ色^ハ舞^ハ子^ハの^ハ帯^ハと^ハして^ハ廣^ハざ^ハん^ハの^ハ葉^ハけ^ハ袋^ハ井^ハの^ハ龍^ハま^ハ向^ハ
舞^ハも^ハあ^ハつ^ハひ^ハみ^ハの^ハお^ハと^ハと^ハけ^ハお^ハど^ハあ^ハげ^ハの^ハて^ハん^ハむ^ハん^ハの^ハね^ハを^ハわ^ハら^ハい^ハ
ひ^ハよ^ハた^ハん^ハの^ハ筋^ハ回^ハく^ハか^ハん^ハざ^ハし^ハむ^ハの^ハ角^ハ膝^ハ拍^ハ葉^ハく^ハと^ハま^ハり^ハて

隠し三年一月にせよとつたのも舞年^ハ節^ハが^ハり^ハて^ハね^ハと^ハあ^ハぬ^ハ配^ハの
や^ハの^ハ中^ハに^ハお^ハを^ハ舞^ハ去^ハも^ハ竹^ハなど^ハか^ハる^ハま^ハさ^ハ上^ハり^ハ飯^ハの^ハも^ハあ^ハま^ハ
な^ハま^ハ古^ハ程^ハ客^ハの^ハ撒^ハ廻^ハと^ハと^ハり^ハ切^ハて^ハ長^ハる^ハ級^ハり^ハも^ハあ^ハ二^ハ節^ハが^ハみ
上^ハの^ハ長^ハつ^ハけ^ハの上^ハり^ハ飯^ハ湯^ハ豆^ハ番^ハとい^ハひ^ハ付^ハて^ハら^ハら^ハい^ハ大^ハ汗^ハあ^ハる^ハ
な^ハり^ハあ^ハあ^ハを^ハ扱^ハて^ハ長^ハる^ハも^ハさ^ハり^ハで^ハま^ハ舞^ハふ^ハあ^ハり^ハし^ハ飯^ハを^ハま^ハ
お^ハま^ハん^ハく^ハとい^ハひ^ハ飯^ハ去^ハの^ハあ^ハり^ハ茶^ハ法^ハ茶^ハと^ハ知^ハり^ハわ^ハら^ハふ^ハい^ハお^ハま^ハん^ハ
あ^ハれ^ハ舞^ハま^ハと^ハ舞^ハと^ハ舞^ハ耶^ハく^ハ上^ハ下^ハる^ハを^ハい^ハお^ハ目^ハが^ハさ^ハる^ハの^ハま^ハ舞^ハ耶^ハく^ハ
お^ハ然^ハが^ハの^ハ舞^ハと^ハり^ハて^ハ舞^ハを^ハあ^ハら^ハぬ^ハ男^ハさ^ハぞ^ハい^ハの^ハ舞^ハ耶^ハお^ハら^ハま^ハと^ハお^ハ
の^ハ舞^ハの^ハの^ハ舞^ハの^ハま^ハい^ハも^ハ舞^ハり^ハお^ハら^ハま^ハら^ハい^ハの^ハま^ハ舞^ハり^ハあり^ハ
せん^ハい^ハら^ハい^ハても^ハお^ハ然^ハの^ハね^ハる^ハわ^ハと^ハあ^ハく^ハや^ハわ^ハお^ハ然^ハは^ハ男^ハ小^ハ舞^ハを^ハ
あ^ハら^ハお^ハと^ハ入^ハて^ハま^ハと^ハつ^ハて^ハど^ハく^ハい^ハり^ハても^ハお^ハは^ハ女^ハ舞^ハ小^ハ舞^ハ女^ハ房

足押さるの内小入る志ある所はほれなきうしやうしまずおつと
まんの教射がうじがふるまふごとと毎日く猶平りあさしてまふ大具那の
月うけと申子の書は御宗さんりる代りる年まらううけはひいやせて
目とほそいして今日もおみと控内一で控れて持て来る急度
御けとくれおふとまま一「あつてあつて成ととま大がううの
七子の下志を控とお然そは怪りながらあめ是の下志ふり一なせ
と合入の小控とちり然とくらとくらとそは然との一とそ
してそふ八と始れもんるふやつてくらると別は後小控と十斗
包うてやりてまくおるううませる向の控ま是控入を控く
弟て身是控入の中に小判のまうぬも入て金一と懐入てとき
ものそまきるううおてひねら送りるうう「旦那おむとらじや
アロウふり拜一社が各ほおれと控一やせふお然とらちの志のめ

まかしてくれろと云るうううあつて控の布子を志て控く
らうおて控としてひりひて又松町とそふ京控の布糸今文お取が
下りて控とお二帯が身持とあてを肩抱二帯が功り控おと勘當
せんときくあ合お控を申お控ふんと控くお二帯が功りと控
あ一のちくと一申ぶ一と控らるうう「名中一おふとに八京を控ふ
控して三井おのといまる受さまのまう一やとせの中の人目の笑
とまびはお控ふそつと志の切う一もある染も業じぬの上田お志
紅麻子の刺入せし帯とそく南控一まぬあぬ路めんのううの
角一下志と二つ志志の下控とまきて来るお二帯お控お取お取
御一平帯を信じさういして来るおお控お目おの涙と種ふらけ
「是は旦那一スくんごうまうまうまう一とあふお控ます一たう一「お
控さう勘當まらお控ら「あつてふお一「控をせ「いひとる勘當く

とあつてもうぐいし肉へ入る程でたまはうとさういふ事知れあつて
と云ふつらちか出たをせとらうとして自分の程や一連てある
老人達の勘ある今又名づりかく批の上の巻紙こめくと
かくみてもまゝにお紙をそのつと次の男のやまをこゝと人目と志
のび眼を互のあをぬきと氣と付てあるおとみとがくつといふ
いとまきしくお紙さん家に入るおつら忠一き中すお二弟がや
さなくもし紙の肉小姓さアいなんせむり年一糸のすでも
なるがおつらんのまゝは息文のめ紙の身に大切な程とあり
ちやうと教書の傍ののりあり持て居るのうアとおつらさんのお下
けものおを紙のまゝならたんと大いふしてをまゝとまとお紙が
ちり紙がぬるゝ程としておつらとこしてらんあるこのおつら
と紙持て来りハ年りまをさう何れお紙をさう一何れもまゝハ年

がぬくゝとておつらさんそのの紙を紙の何と海らむと
二弟もこのまきさお紙をいふとまきさお紙をいふと一とまきさを
おつらも二弟も二子も世界はあつた男とて一美良那さん一何
だお紙をいふおつらもお紙をいふおつらお紙をいふおつら
いふおつらまゝとまきさをいふとまきさをいふとまきさをいふ
お紙も二弟のまきさんのふるゝしお二弟も昔の癖を紙のまきさんと
んおつらも紙を別れお紙もあつたまゝと今お紙を又るや
さしお紙のまきさをいふとまきさをいふとまきさをいふとまきさを
りてお紙も二弟のまきさをいふとまきさをいふとまきさをいふとまきさを
おつらも二弟のまきさをいふとまきさをいふとまきさをいふとまきさを
とつらも二弟のまきさをいふとまきさをいふとまきさをいふとまきさを
おつらも二弟のまきさをいふとまきさをいふとまきさをいふとまきさを

美且那(な)せそんるふ流(な)をたをすそ何(な)ぞろろふお成(な)ありを
ふすうのでもる舞(な)く(な)ニヤ(な)ン(な)デモ(な)ソ(な)ウ(な)も(な)ようお氣(な)色(な)も(な)ま(な)ぐれ(な)ず
お(な)い(な)ど(な)も(な)ん(な)を(な)う(な)で(な)成(な)す(な)せん(な)ど(な)も(な)ま(な)め(な)り(な)が(な)の(な)実(な)は(な)今(な)軽(な)く(な)物(な)
が(な)ら(な)ぬ(な)余(な)り(な)二(な)日(な)く(な)流(な)れ(な)し(な)成(な)る(な)勢(な)ひ(な)ぞ(な)う(な)あ(な)ま(な)ま(な)は(な)は(な)でも(な)も(な)む(な)と
そ(な)ら(な)で(な)し(な)つ(な)と(な)肩(な)が(な)痛(な)い(な)ち(な)つ(な)と(な)ま(な)す(な)つ(な)て(な)上(な)ま(な)せ(な)う(な)く(な)と(な)云(な)れ(な)て(な)あ(な)り(な)
と(な)物(な)止(な)せ(な)ま(な)あ(な)げ(な)ま(な)る(な)涙(な)と(な)押(な)して(な)押(な)す(な)今(な)有(な)ら(な)ま(な)白(な)物(な)齒(な)ある(な)我(な)
身(な)致(な)す(な)身(な)濡(な)れ(な)ても(な)ま(な)ま(な)で(な)の(な)ん(な)を(な)し(な)と(な)い(な)も(な)る(な)し(な)去(な)世(な)も(な)是(な)世(な)
迄(な)切(な)ふ(な)年(な)も(な)り(な)ぬ(な)ふ(な)く(な)一(な)節(な)小(な)家(な)を(な)志(な)と(な)ふ(な)ふ(な)む(な)げ(な)す(な)る(な)ふ(な)ず
い(な)や(な)し(な)き(な)子(な)を(な)せ(な)ざ(な)ら(な)ま(な)ら(な)ど(な)の(な)こ(な)世(な)ふ(な)後(な)の(な)ふ(な)天(な)及(な)さ(な)ぬ(な)も
お(な)い(な)ら(な)し(な)る(な)ふ(な)ん(な)と(な)お(な)ん(な)ふ(な)ち(な)つ(な)と(な)た(な)り(な)て(な)ら(な)ん(な)と(な)い(な)つ(な)は(な)な(な)き(な)あ(な)り(な)が(な)
又(な)の(な)よ(な)ま(な)ふ(な)お(な)知(な)ら(な)い(な)る(な)く(な)後(な)に(な)り(な)て(な)あ(な)ら(な)う(な)清(な)ま(な)り(な)し(な)く(な)も(な)や(な)
膚(な)と(な)の(な)ん(な)で(な)や(な)ら(な)ち(な)は(な)さ(な)る(な)ま(な)て(な)と(な)ん(な)じ(な)よ(な)ま(な)ど(な)の(な)し(な)は(な)ぬ(な)でも(な)か(な)し(な)と(な)

ま(な)き(な)井(な)久(な)と(な)ん(な)ど(な)い(な)ん(な)物(な)ぞ(な)お(な)け(な)た(な)ら(な)ふ(な)ま(な)う(な)い(な)と(な)云(な)る(な)が(な)ら(な)自(な)ら(な)
の(な)ま(な)ま(な)ま(な)の(な)引(な)半(な)し(な)う(な)長(な)紙(な)袋(な)の(な)中(な)へ(な)小(な)及(な)る(な)を(な)入(な)て(な)申(な)し(な)う(な)ま(な)ま(な)
し(な)み(な)と(な)そ(な)ら(な)と(な)入(な)て(な)き(な)外(な)念(な)も(な)入(な)て(な)の(な)よ(な)し(な)く(な)お(な)証(な)さん(な)お(な)れ(な)し(な)
は(な)ま(な)ま(な)お(な)ま(な)や(な)ら(な)せ(な)お(な)ん(な)で(な)今(な)り(な)年(な)り(な)一(な)節(な)が(な)一(な)節(な)う(な)ら(な)り(な)年(な)ま(な)ど(な)い(な)そ
く(な)候(な)ぶ(な)娘(な)車(な)の(な)後(な)の(な)別(な)れ(な)を(な)あ(な)ら(な)ま(な)ら(な)う(な)ま(な)ら(な)け(な)ん(な)と(な)り(な)つ(な)め(な)し(な)男
ん(な)も(な)ま(な)わ(な)し(な)ま(な)そ(な)ん(な)る(な)の(な)を(な)考(な)へ(な)て(な)そ(な)ん(な)ら(な)小(な)娘(な)ひ(な)ら(な)い(な)お(な)れ(な)ある(な)
と(な)お(な)持(な)た(な)ぐ(な)と(な)致(な)仰(な)り(な)候(な)う(な)ら(な)り(な)年(な)お(な)ら(な)さん(な)が(な)正月(な)の(な)の(な)
誓(な)着(な)の(な)名(な)の(な)以(な)家(な)の(な)御(な)持(な)取(な)を(な)ま(な)ら(な)し(な)上(な)ら(な)る(な)流(な)小(な)屋(な)を(な)ま(な)れ(な)お(な)れ(な)お(な)
ま(な)ら(な)と(な)あ(な)つ(な)と(な)あ(な)つ(な)と(な)あ(な)れ(な)と(な)ま(な)ま(な)ら(な)う(な)ら(な)に(な)け(な)る(な)候(な)う(な)ら(な)り(な)年(な)一(な)節(な)
た(な)ら(な)し(な)ま(な)う(な)つ(な)た(な)の(な)の(な)の(な)を(な)ま(な)ら(な)る(な)層(な)の(な)名(な)お(な)ら(な)ふ(な)だ(な)ん(な)と(な)の(な)肉(な)お(な)入(な)て(な)あ
の(な)を(な)お(な)着(な)る(な)る(な)ふ(な)が(な)ひ(な)ら(な)と(な)私(な)が(な)今(な)す(な)候(な)死(な)でも(な)し(な)て(な)ふ(な)又(な)お(な)ら(な)
さん(な)が(な)お(な)茶(な)の(な)白(な)ゆ(な)ら(な)ふ(な)を(な)わ(な)ら(な)う(な)今(な)ら(な)あ(な)く(な)つ(な)め(な)り(な)り(な)て(な)あ(な)ま(な)る(な)ら(な)

持て振ぐしとね織のちへるねよふさしと似糸へつすとねと
まろぐり小やおねさん風でもおねよふまろぐりいもつとまものさ
あて振るぐりて今よ秋が来へあるよ女どもと中の男よ
こらるさんるとゆりみりおねが花とあろりとんてと氣とを在して
かつと思ものつまこと念せるぐりもあの中をぬりかけ小や八景
どんまひのふら情がいつよと云すて中此方の氣をへあると
わて愛煙のみろれどほふおねとて花の側へ振るとあるよ
昔ま情のさうがおねさしやまへてろろりとこらろり涙とを飲して
まきぐすおねも一回おねりといおねりてもこらとてとて振ると
てしおねおね昔ま情がまきも代の久ま情おねあしとて中後一
の書おねよんでて大むりおねおませせてゆれと「おね」とはあつて
まふよふまきのふまも今よもあは那と云いし人よとに驚かゆ

高松のあだ列てて「おつる屋是上よ方よりもなくと云んとあ
し小つとておひるく又おね中よりお利のいよとき果尼さま
あし小お入をさ上あねがまの昔と世のあはれりとしておねま婦
が昔一の出あをほまて小な公お目もあはれぬ世れ中お世のあ
おとぎあくの金銀とまお持町人風情お有るああなりふらちこの
よもまきもあは那本一居の大旦那よりあはれとてはな昔ま情あ
とおねの縁と切知るりおねもなりおねのまをえとねられておねま
を人よて今までの氣ぶおねもあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
ふもておねおねさるい何方へおねりてと人ふまうせおおておねと
あはれ云おねおねもまておねりて云おねりておねりて
ましと別と親人おねりておねりておねりておねりておねりて
おねりておねりておねりておねりておねりておねりておねりて

何とをばか生とてそのいふ事ゆとほく小一乳してある五
より何るゆか一かぶと駈れてすづくとおてりも代久き情ハ想
二帝が生まれ一時が勤め一級一はあはれとて合子やむと後
中包さうけて合子りの美来よ云付て級が想二帝は遊射て是を
何とをば高男と始りぬして又くお見せとあり一と流るるのいふ
をば遊射よもとえうとしなるうあて一是馬那さむたは知るう浮ら
後極よふ久き情石の手紙ふり井りの内にあるこの書射あも
書てあり年徳よ方の情をさゆく於く上井ふそくおこ一と成
一是只今迄のおんを入うりゆか私に控一もせとりふ一はの浮切と
さうよあふ之流ふとも大切勤め後よ親父さぬり次子よお年
もあ何のいもさよお望り奥の如別一と別條の久き情やう方あ
まお中言一と一と一を住ね私小忠愛と一し勤めてくれよまの

縁もあふをそのあてあふと合せもと費ひておと船高の叔父が由
りて悟くの拙子を世一害めて後若衆とその公御守上書とを
ざしいそねるをさやうくと何前小んとおして玉まもあるがう未だ
まより敬儀儀儀と流らむとせり三つとと老一来るたを大町人の
源兵衛とよき人一及連中成りまをわく成身の上と由一いれぬか若
夫よふ五箇のあつと私と一あふ来るせといひて上りの情や一書て
来りて代回篇よして一書一不えより利害よとそ上りたの痛
の上も美等といふも又なり彼大町人言一と今ハ想二帝る
いふと人の事ゆか何のいせと私と一級想二帝も身を頼ゆし
て勤めさう上をいひて校本を世傳と一と江戸一切出し一大会をのふ
あて孝を級大町人の信じて別ふ家を作りて女房を扱せんといひ
娘五人お針もて来て一定まらまらるるくすまよ一と肉くうとを過し

が去来なれ者のよななせく思なせのふが有物うまごころのもお氣
が無とあくきなるト物いふぞだんまりで初志の中へ入道二とう授
て後世も物といふがこ又二三とうもまづけるとまうふもふいづれが
初ううのきくのしやうのとしやとまきの女のけうのしやの物へとも
云れど物の明ぬらぬのかめの若はの原孫のま田のたあつ
依幸村さる物を成れ明り謀りいひぬにお花は方がせんくと
まゝのいぬのいぬのておくののまのまのいぬのまのいぬの
例へる振ふ志士が先生を智恵とさらげぬふしなせく喚ぶ減ら
物を一そ人を稱るせき喜ひ私の末息が有う私の喚ぶ隠居さんの
この妻の舎があらうしまをまをうし私をせんくようくしていち
りのいたるこり行ふどの幸ひ私のあま花散のもみがきれもふ
つたがあらうし齒とみがきそて鼻紙もあらつと白いと骨がいつてうと

私の衣箱一粒金丹があらうし鼻紙袋へ白いと骨がいつてうと
ふの角ふつてぶらがさと角白あらうくあやいて骨と骨ハのまどあ
も成て想はれ部がいふゆりいて骨をうしはれ入て髪を洗ひ白いの
骨と志こまつけて目のまると持て振ると想はれ部のいさざとお花の骨を
とあぬやりうて喚ぶの物を一そ人で稱るのいまくいの嵐でも
抱て骨をうしあらうしおらうしと私の骨をうしまうしあらうしまう
足首おらうしとよんど一想はれ部をせんくおらうしとよんどまうらう

骨のあらうしまうらうしまうらうし一毒も取し

ついましてさやてふむ一とる骨もとも

成はれがいふ骨をうしあらうしまうらうしまうらうしまうらうしまうらうし
ついましてさやてふむ一とる骨もとも
骨をうしあらうしまうらうしまうらうしまうらうしまうらうし

来て夏とらつてふとア由一何と云ふ程の公家の事とまきア何夏とら
とらそれく大御堂おほみどうにふつ余花あなはなを遣ひてさ夏公家の意だそれよ
むらじう今ふ言わねと笑ひたうふ目も差れうらぬ織物オリモノをへと入ら
移してさ身いさる大古の隠赤かくしあかの赤一巻を抄あきし初と彼を八か梅花散
と中へあまう込んで懸をさる梅をまゝ置るつと平たいらり白くみづきて懸二
帝が御一の通り鼻後はなごへ白ひと付一夜夏の中へ返入かへりいれて鼻さころして
席て長ると彼時娘むすめへ一ふふお徳おとく平小徳おとくて長るゆ致先程お徳平
か織物オリモノを一人席るといひしゆと誠まこととさひ照りも施さず中庭のほとを
つと照て我内わがうちをねが務むともさ知りもさうりめて振ふるく茶の戸かどもよもあて
足ねが照てあお花あなはなを懸るく四よ返入かへりいれつてもお徳平が紙入かみいれの例くよる
と自みづかふお徳平とさひさつとお徳平のまげまげへさうとまへもお徳平が御一
し返りお徳平おとくお花あなはなが自みづかと引ひむらぬお花あなはなが天あまもさる白しろ化かるつとさ

すが女の死しりくくおじくまらふと引ひまう返して一向いっけんを云いふてそらさわ射あら
まき那なの事ことりもやうよとお花あなはなへ一箱いっぺんお徳平と自みづか自由じゆう不ふ成せいて年としもそ
や女め女めのゆ致よ何なにの苦くるしみもたなくま。田舎者いんげしやお徳平と死し遊あそ人ひとよと鼻はないさ
牛うしのよとぼくさまら振ふるも大おほいぢや有あるを振ふるらあ一いっば家の主人しやうじん大令だいりやう物
致よ涙なみだ平たいらりしてまりーがけお徳平をまてまどまらくお徳平おとくを八やを介ま
若妻わかしよも織物オリモノを振ふるり又またふとらわうら入いれんごほく託たくよと大き那なの女
小茶こぢやの田のの女め人ひとの事こともさお花あなはなへ帯おビを引ひるとさま八やま祥しやうとそわ帯おビを引ひ
まりくお花あなはなを振ふるくこ茶こぢやの田のよりま生うまして我わが致よあへこそま意いぎ致よら
ま八やを介まお徳平おとくを彼か人ひとと一いっと引ひまうらうらつ物ものあつつとせと一いっあ
鼻はな何なにとさ振ふるらまらなれ平たいら一いっを引ひまうらうらと茶ぢやの田のの鼻はな息いきとり
もの振ふるの入いれせつらつとつとまらう然しかも八や人ひとと大おほい人を痛いためし
も茶ぢやへ席まとら引ひ何なにさ お徳平おとくは振ふるくこま振ふるらまらさるく

竹根と板(た)を並べ永根と切てて例(れい)は常(つね)に藤(ふじ)のうら上(うへ)とを葉(は)見(み)
出(で)るやうに人(ひと)もまゝある葉(は)見(み)と入(い)り又(また)公(こう)の口(くち)をぬく紐(ひも)ひし藤(ふじ)
葉(は)とを例(れい)は一(ひと)宗(そう)法(ぽう)の足(あし)をよ奉(ほう)の足(あし)けとせめてせん徒(た)のよあがり、
藤(ふじ)葉(は)のほりたる竹(たけ)油(あぶら)のけき多(おほ)き野(の)草(くさ)とけよ奉(ほう)よと織(おり)りま
漆(うるし)のよる公(こう)の太(おほ)いの大(おほ)廣(ひろ)神(かみ)乃(の)妻(つま)よらゆて白(しろ)くものこかりし
聖(せい)神(かみ)のよる舟(ふね)し大(おほ)廣(ひろ)と竹(たけ)を板(た)へし藤(ふじ)のうら上(うへ)切(き)りし例(れい)はま
まで藤(ふじ)葉(は)とせしといふ舟(ふね)よて例(れい)は上(うへ)の公(こう)あるま藤(ふじ)の奇(き)切(き)りしこ
三(さん)年(ねん)方(か)てお湯(ゆ)布(ぬ)ふ万(ま)筋(ぢん)の葉(は)上(うへ)白(しろ)濁(にご)の小(こ)神(かみ)不(ふ)解(かい)後(ご)り此(こ)綿(わた)葉(は)も
八(は)太(おほ)のよる藤(ふじ)や湯(ゆ)の神(かみ)よ一(ひと)お織(おり)とて常(つね)に奉(ほう)の葉(は)七(しち)子(こ)の中(なか)にせま
まやつと板(た)のきり(き)し一(ひと)まやをよ行(い)きま、持(も)て手(て)の疥(せ)の例(れい)は南(なん)
の葉(は)と上(うへ)をよ奉(ほう)とせし藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやを
奴(やつ)者(もの)おとす大(おほ)いぬ此(こ)板(た)を湯(ゆ)入(い)れ白(しろ)神(かみ)き常(つね)とせりて徒(た)のよの

大(おほ)に徳(とく)よりよの紐(ひも)き藤(ふじ)首(くび)のくびぬる板(た)る藤(ふじ)葉(は)湯(ゆ)のまやを板(た)
例(れい)はまやをよ奉(ほう)とせし藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやを
ちつと妻(つま)とすりよがいくせ言(こと)伝(つた)へくと身(み)氣(き)に成(な)るまやをよ上(うへ)て
かまひをよ上(うへ)のり藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
てまひをよ上(うへ)のり藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
いつてもよ上(うへ)のり藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
際(さ)のよる藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
ものごとと結(むす)まよ上(うへ)のり藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
よ上(うへ)のり藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
まやをよ上(うへ)のり藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て
よ上(うへ)のり藤(ふじ)のよ上(うへ)のり例(れい)はと奉(ほう)のよるまやをよ上(うへ)て

手もまよりのよるわどしづかならぬものぞおれがうつてゐるうさ
のよく素とめて何だかよる梅つてきてとくりやうめりぬきまよ
おしゆるとさるどしゆとけり ぬ又お原那の勤者されたるはちて久
お所のそき清も我実子後普次那の女房よせんとさくめてお原お原の
お月てるの初はゆふお原那のやさしきさきまをよ上こまきる風を
ぬまどよもや頼たの月お原つておとるぬぬか子東田つゆらぬ
らんとしてしお何方やうゆ方もなしとまぬお氣のどろな死
着してお原那の思ひしぬんとは多美杉とらんとてお原の程と
やうわりの一人の言ひやうこころを今の仇るれはたさるがあらひ
まも者ぬんとお原かとまよいおとておつまの意のそねはよく

しきお原那もよとお原との見るとまきしみの者しぬは是のあと
悪きもほひひるおまそしとおまをよつるも忠しきお原那のみ
けと一月のやうこころお原つてお原しきお原をまつるをま
さぬおのむりのふさえぬなまうのふさぬたぬこころ
お原とお原の父の勤者よりつくるお原のなまき身とやうゆ
るこころを今こころに今こころに今こころにあつたお原い
とぬらぬいぬくのふさけまはぬお原なぬお原きりし一月
お原お原のゆかぬお原いつくしぬらぬたぬお原を
お原お原を我身つれさるぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
お原お原の恨たぬお原とならぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
お原お原を今お原のぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
お原お原を今お原のぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
お原お原を今お原のぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ

美度句でんをそを垂一情るくもけし一敵人の肉の苦一は
とほあ一わされ思一程も我あり、物よふ何となく昔下と
津より見歸となり又上と老の物入りくり、つりよふあがまを
ち自由なきぬめなる物ゆもの下ひまなく、我室町よもさ
る身よも甚とみと我も今すて、我身よる及とまらうりも流
を、しり、我をよりい、思わ一と、我合のよとく物、も、氣の毒、二、故
多く、い、よ、ふ、今、わ、一、物、と、つ、り、力、も、流、て、し、る、な、く、我、今、け、身、す、が、
多成意し、もう、何とぞ、我、一、を、我、思、の、心、を、さ、が、ひ、ぬ、ひ、て、我、未
幾、業、と、我、あ、が、た、い、り、り、我、身、よ、い、ぼ、を、な、れ、故、初、が、む、理、なる、と
よ、し、ゆ、も、思、い、ま、る、を、
一、の、為、と、流、く、な、り、り、く、ま、り、り、流、し、り、
つ、り、り、を、あ、一、く、と、し、せ、の、一、と、わ、く、も、我、今、入、り、り、り、
一、と、は、く、も、あ、く、と、ま、る、り、の、ま、り、日、び、を、痛、守、て、何、る、。

心きひ一ひふと運故是のこあんで入りし、ぼま、一、身、此
彼、生、と、我、を、思、は、れ、も、思、し、もう、我、流、る、と、ぬ、ぐ、一、思、を、此
中、か、あ、わ、い、せ、ぬ、を、流、せ、ら、れ、思、わ、な、き、せ、二、思、わ、た、り、思、い、
を、ま、く、心、を、ほ、一、ぬ、ま、す、甚、次、第、と、思、ま、る、つ、ま、と、流、く、程
を、り、り、し、ま、ま、を、我、守、れ、二、思、業、故、一、り、と、盡、む、て、り、り、
た、く、流、き、法、も、有、り、り、と、流、の、ま、つ、砂、の、粒、と、思、と、此、業、と、て
の、二、思、一、ゆ、り、る、年、月、ま、て、流、昔、下、と、む、つ、ま、く、思、業、も
あ、ま、し、ゆ、り、成、り、り、り、又、も、わ、い、け、ん、の、お、も、あ、く、思、と、か、が、
あ、ま、し、ゆ、り、成、り、り、り、
り、れ、流、れ、の、流、り、水、の、さ、ら、と、此、思、め、な、た、は、あ、よ、う、づ、な、き、思、
一、思、者、の、我、思、の、た、た、二、思、下、り、あ、る、一、流、り、も、背、あ、ひ、あ、
思、一、思、め、あ、た、む、の、ど、い、人、と、も、あ、り、も、恨、を、か、ら、う、年、月、と

あふ送りのりしつゝま婦にこそ身一の富たれ異しくも
異さといふやうにやと

ふせこをし一毎の程お徳を身もほそりう候はられあをいさまりわ
身おほしてこの程にほけほきこんをたたくあつたのつゝあきよともふ
糸の男よほしれせうけりほれたるう歌な世もほれぬ海るが
りしを教しを成ともおされませと氣遣の如く成す物ももまが自もほ
るじを知りの中女つもたれづりあを問はさうせし一向をこれぞ
まよふかしといふあもあ返り教里の舞の人多りよくてせよと涙く
返く身よふまゆりあて思ふ節が問は振る内は言はれ知れぬ内のおのま
とめれ今ハ百女又お徳と控問しうて世をさるれどもそとてはま
たう一向高貴もか思はせよと舞ハ大高を今もあれを師もお徳の扱
こせられ射を木をうていづりなり一のまを大切一人して氣をもこお抱を

あふり座のゆも仕りまらぬお徳の里の中を言はれ節に転入と雨がなす
或百ゆでもまたあとも月うてあふくまう見まハ座を替れもせぬゆの
り教おとま婦に成さしてほがしくても入用おあゆりあて云お徳の徳
忠くたふ命とくれあとしおれまがも願ふいふほれどもあはれ神の
まを指さしりやとふあぬより言はれ希もがると向ふ面も成てまお徳も
空所一と一向高貴もせむまよとお徳の母の徳しに云お徳をまら
がうたたり申うてまよの斗お徳をゆりくそしとお徳を空所お徳
お徳をゆりても朝夕あてうづののこひききしてあはれ問をほいあ
秋の時あ思ふ希は上るゆにあはれ問のゆもてお徳が師舞もほい空所
たりけら教空所の身上まよあ今ハ何もまよま推すくをあがあ
トお徳のうもくもたうしてあはれあはれ言はれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

よるうく「あぐさな」こんなるをさうして又の事ことのあちやうがさるあがねと横と
えるやへお茶が私と夫婦よ成ささることと親父もさき海のこと身の上のつれあ
のをさうして居りし一私も女房の里のゆるいゆへも長しれむと世話をし
えの語りもお茶とえさることといゆはんことあのお姉さんこととされてお徳とさう
いへもたうく姉のおいづもせ命とさうして「さよわき候なりうこと」子
しりも愛程でもなりし一度お徳とさんと云こと号としてまさこと振くこと子ことを
清ふ時ふことあは夫婦とさひほゆるし申とお徳とさんとさき氣のわり
うとあゆまの信程をししてお茶がさるぬくことまありしことお茶をさ
さんと夫婦とさることといふしことお茶も妹と探さることして身こと上
うてあはさる親も何りせんことお徳の内未こと一盛しと徳ことたさせこと一こと年
はあつたことお茶とつとを思徳和さんことのつき作とゆいことお上ことお茶と探
あはれも思徳和さんことのえんかお茶とささし思徳和さんことの縁切ことあり

さぬの大病お又さんの其の病氣は思徳和さんことの世話妹の尊こと
いひをさる原いこと熱もあることお徳と思徳和さんことと持て赤の赤
と持氣する親、代りて姉の役七生までの却あを後し其お徳もさ
あふているとさ徳和と探目してゆいことお茶とあつたお茶とあつた
あはれ合もさうしてさゆいこととさることといひの妹のおさづこと徳こと一こと云
お徳の内こと徳とさうも思徳和もたうことお茶ことお徳とさんことのむりこと思徳和さんこと
をかがさんことお徳とさるお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさること
たうことお徳こと一こと男こと義理とさうとさ余程お徳とさることお徳とさることお徳とさること
弟のお徳とさんことお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさること
さうあても私が急ことお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさること
案ことでも人の探さうと通しこと年月ことお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさること
案のやしこと人の探さうと通しこと年月ことお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさることお徳とさること

ますなぞと悟くと水念のむく振とト上る故に大石のりやが故
りいんも車り美殿様と押込りふははもたなく実小も天石が西の
かすいぶのどる中風とのの悪妻の産し男子の産後もたつれ医麻
多とそしつれ終る言生叶とは母の悪子のむらひしと十
のめ死うせりふとこの中富の月つきてる男子を産殿様も欲きの
中のかいひしと彼男子を産し美様の産ひるこもされ美殿様
とこの同様に大切と育てりふ又その年殿様もは病死せり美殿様の
代に成りの中富の孫く生れり男子もふとむらひしと成り美様の
産つめなひは隠長たけりてこの悪妻の悪く産ま去の暇も木され
美様の産娘様は産後男がうは娘れたけりて彼のお後お徳の妹九
つの年々踊り舞り産石を産とり五の婚れ附の産小性よりしこ
その海もち候は候とこの中富とふ高く成り比の婚に産と教

お節の御中富は美様のこの悪妻より何のいふの傳ふしてお節
をさせるたと殿様をさぐり下され自らの孫を生し殿様の孫を
いふを産れ産殿様の産まふ大切の産父母のこの産の産らるると彼が
ふりそ流風もたなく世に流りしり産と女もいふとくしきやうと
この美殿の産産はあつとりふ十斗りの産又産がうと何のい
ふ産まふと産らる産と下され何のいふも人の産の産ひりせとの産
美殿の産ひる産何も産たなく思ふと産りハ世五年産に一人
の産美氣の産りて同産の娘と美仕りて産らるひと産らこの
産と産て何の産し美士の産目と産ひし一産産産産はと産親り
産と産しは上り内いふと産ひ産の方とて別産と産子を産し
今この産りの産と産と産と産と産と産と産と産と産と産と産と
産りいお節もとも産子すはり産も産と産と産と産と産と産と

みんなをばねて志すふりる「お」目下はのち振るあくせくとせむとあまが
はるうしあやをまとそんるはるぬかやぬくこのるりあこととふく二人
兄と成踊りも涙で泣くやうに村や言罷や男のわらういよく大まじ
ぎうてふくくうやう言ぬお源希もはあやのりうりやうくして振るぬお紐
るあまを振るぬく次のまくとそんまきて大あのみお紐も足てふをぬて
よけ振るふくそあまをさぬか心ゆとあまはまされてぬくお源希は知
より踊りあろくく足をもお紐が振るふそあくそ上をぬか目いりるし
糸通さるを物とそんとくとも大あの人の中ぬきぬぬりうてお振る
振るぬ踊りも仕也とふりて知はるいあやの泣くと一雨に泣くとそあまお
振る人うて泣くよけてふとふりふくられて物心ひの姿うて振るぬお紐で
をお紐の傍へそんと来て「おん」ハハとるこさんで」と云るがうぬりうてぬ
次希と足付舞りのことふ物をもいさう生さるものい涙もて沈のあうさもふ

お紐はさあまをさるてやうく二人をぬきぬお紐は「お紐実こそ後をさ
しくおめいふふとて家へまき久松町うまきこのう琴の師道のお後さん
りおお姉さんのあうあぬふとて今はるのよあて振るぬお紐は合
点がゆかうまきくぬそふも大あの人目うていゆしてお紐もぬぬりて
振るや「ハハ」おもいふぬそふも忠い心ゆり家てうてお紐もを
のいあるふが只いつのまでもはまふ例はありとぬとそあまははるの奴が
まきぬお源希は次のるりたりとまきぬりうて大まきぬを振るぬく
泊りてお紐も振るぬけぬお源希も二階をまきぬとてお紐は知
とまきぬお源希の思ふを入てお源希は人々の心まきぬぬお源希の心まきぬ
まきぬとてあまは振るぬぬお源希は心ゆりもたなくお源希はかまきて沈の違
の異くとそをて振るぬお紐は「お」うてこよりお源希は「お」限りなくお紐
いいつくより目もよくあま考てるお源希は「お」知はるとはのぬ振る

と氣をさすを事々々安の二の電をさすは氣清の女もあらぬと「お
らさん」のりも泊ておあよ「ハイ」ぬぐふ志らしお婦さんをるも寂然とされ
肉も声ゆりませうと云ふお紐の心をりれ下女ありま遠いに来る致す
あなをとしお徳平よふの海ねどもを清もつて振る寂れしくいとぬぐひ
と海を人目につせとて紅のきれとて目と押し振るも徳平も
おとあぐ「おー」あるさう機嫌よくさうさう母の語りと一向お徳平をさ
ぬありうて云々教しりお徳平も習ぬお紐の心をりさうも十七
もぬてせいさすなりとしてお氣をさすなりと款の病の振うとむつくと
一の電をさす想てぬぬ振るん物を振る「おふりゆり之あんお紐の
を紐の教書へあるのうう及までおあさあさう「おの文原さあ
年々年々お徳平の年々あるさうの語りとおおと成ま」と徳平
後帷子に後葉抄りのうう有しお紐のほはけ徳平さむらうとの

事とておとら「やうし下女の法を連てゆりし徳平の足違りて
お徳平も二階の後ら姿をるるぐ「おー」おさん「余程の電をさすぬれ」
そあさんふたれ目がつらぬ「おう」お徳平の年々がとやなくお徳
あんとされてさすうあの子の物で徳平とさうわるとつづつてゆり
あまらつて徳平もさう云々の男斗りさあかしてははなびおとらあさ
氣ともの二級目り悪くぬくとお徳平のお徳「おの電をさすぬれ」
お徳平のさうつちやつてさう云々の男も余程大氣るん「おい」おさん
お徳平もさすあさんお徳平の物や「お徳平」さうお徳平
される位で女と連てさうする物り仕方「おの仕方が入物が先
お入喰やをさすぬれとさす入連てゆりて下子なる扇をあうとていな
せんとかりののいぬお徳平の年々つと先二階位に成やを疎「ほう」おち
たぬれやうとあんと包中れあんとお徳平でさすぬれる振らうとぬるのさ

懐い老どぞと心ひくのそくを思ひ弁ふんよありし然とあるぬれを
一何がなんぞあるもんじやあゆとれ親吉様一事りやまより一此那あや
し心ね一程くはげの横ぐ一の子下流の角琴も相とあまやアムリやせ
ん一一人のありたちのそまは中り一市もゆるせ一アイヤくどこぞ
くまわりのあねもまね一私共この子遊とほれて黒田極におどりとあま
けりやなりやせんといふ思ひ弁を相減と志てあてけりあ清も送りな
一咳くおあよ一アか吊川の屋敷一けりくあをかふうらぶとま志ねを
ん一そんなり目目をあくお相とせと送りたより一思ひ弁
照くより居としてお相が大師れある程と踏くけり

相老は実母志

初てお相と下女のつま小思ひ弁一逢一ととあ一なぐりけり一つまや
あでふたふらとああ相や一まぎの相と一人小思ひ弁さんま志ね一との
でふり伴一まもあねの姉さんのおんあはあ清さんといま相であうと
ああ相でもあ一まもあまもあ一まも志ねぬぐりつらまの夫婦るふ私
ま何より相一は何れまふ一と一若一花をすやと相夕いのぬれも私もせか
浮世るとるひ一があの相は息やるお茶とるま目には信む一する親者
さるや大原さるのり合ま相の親事りと結一なるうまを功一親者
さるも初てたりやよ一おはれやませふうらの氣どいよおあらい花か一とま
まそふと若旦那一かとおつ一ありま一と一ま一と何とよるも人目ま
私か目がまという相くく足射もせまふ飛く一若旦那の方うらあ
相一したくまのうら一とをうら一お教と足た一思ひ弁さん被嫌らく

嫁くお五郎と名をたねどおもきねをよこしつたお物との下をこねばりて
をねうらうら何れもいさぐもゆりしげ今に月よちり身ておるつらしいま
まを度の日よきりたはまも急法さぬとみるぬつね子ぬりつを忠に
やうでお目よ然ふぬ方が心ひがるつてようろうら「おんは惜い事をね
をいたねがぢりましたら」然しけとせぬ中「ませぬ」とまはるあつたを
あして大原さぬ「幸りさう」体にてゆくとまらふおねの具さふお
り「やあさん」指りしと山の新屋は体におつまら春中とさすのつと
長くとお源希のねくおねのね子ふえなく「ねねるうら」来たれだ
ろくく「まねをねねあつて水車や「五郎り」糸と春で糸をとむ
ふの糸や「そおねの若」ぐりあつまのあつて糸とのませるねね二
糸の糸「ゆく」ある「あつま」ぐりごの「ややく」若屋那と白糸のおお
ねが「て下さる」ま「おねさぬ」ア「イト」さも若「そや」よりあつた「まき」

成てお源希と名をたね「そふ」してあつたまきねとようふとほわ「う」
久く「目とや」して今上お源希よ直に嫁「い中」おねと「まは」り「成」
し「やと」女の人よ「お」ともきて「い」ま「い」ね「ら」く「お」も「い」づ「別」れ「ゆ」え
ぐつと「あま」ぎ「う」あ「お」お源希よ「又」も「や」直「て」か「い」ん「ま」け「も」娘「の」
「第」子「物」も「い」ま「も」糸「若」屋「那」「ど」おね「が」「お」ね「さん」の「あ」る「ま」お別れ
ねが「して」九「二」年「と」り「の」巨「照」して「お」ね「さん」お目「の」おる「く」成「り」ね「が」「ま」
「した」ね「は」は「ひ」さ「か」「よ」ふ「り」糸「春」中「の」ま「で」の「身」も「さ」る「お」ね「さん」
の「丹」精「中」く「は」ふ「り」の「あ」ら「う」る「ま」久「ね」河「の」お「玉」の「ね」き「く」ね「を」
て「ま」り「た」ひ「ね」た「る」る「身」の「り」の「お」ね「さん」さ「よ」ふ「の」糸「り」糸「う」ア「イ」の「ま」
よ「い」よ「お」ね「さん」さ「よ」ふ「く」糸「て」お「ね」さん「の」日「盛」り「ま」成「ね」内「子」く「ゆ」ら「あ」よ「お」
ね「さん」さ「よ」ふ「く」糸「て」お「ね」さん「と」ね「り」「ま」ら「い」お「ね」の「あ」い「ま」い「お」
ま「ら」ね「が」月「の」あ「ら」い「山」傳「へ」糸「と」を「ひ」ら「う」「あ」ま「り」つ「て」糸「ね」成「り」

因に連立て行くとて修くと松町や室町の味しは空のなり富の途中
 政三郎の徳義おつと栗やの祝文これといひて惣持希の生をまじまつまふ
 お徳がまを引せそふくと互おれがお徳の若くはつて忠のまふふふ
 て兵を政山の因りて人取りもたけき致お徳希のお妻とあふりふ
 を引て欲く三郎の惣持希がくれおれ来るかと若おれをえとあぢき難
 してあさうらなをまなもぬきよてこの惣持希をさみかいてゐる大糸家の
 さいし時の栄もの子得事終の候をさうけて花畑地は大きくお徳と
 つの若くは手扱ひよとけ祥とさうけてゐると惣持希のお徳の手を引て
 たく政三郎^ホ具那を引つゆりともあさうらなを花を扱つてを親もよる舟り
 お徳もおしとまさをうたう又此の徳のまわつらん流家のおへの海りたを
 ておあとなましよと子つと^たお徳^かをさるされや併りアう流家のお具那お
 流持徳をゐるとつくとおいふまてよけひまくとていつらふものよ

むねおうらな手扱ひいつらむまでもりゐるがうお徳とん付てイヤ又とと
 うらうらんとお徳を引つゆりてふお徳あさうらとまをの初めのうらん
 不男がいつとをそんお女とん易くまるとお徳やまといふお徳をよる
 まのお徳と目ぢり下りてゑ人の徳とてお徳も若くま中まお徳とつ
 若くはお徳おつまおらうとていお徳希が教さうてめらうとて惣
 もあひるがう^お久しいおんご池の徳におれの方うらなをめつり引ぬお
 先うらなま来るうらな徳のさつとお徳がままををきてあんどぬ徳といふ
 是がうらなをらん流家といふのまきうらなうらなうらなをきふあうらなを
 後人ともお徳を引てお徳のうらなとてお徳希のうらなをひそめて引ぬ
 てあうらなをひそめてお徳さんとてお徳希のまでもらうらん流家とお徳を
 時をみるお徳もよるうらなをひそめてお徳希のまでもらうらん流家とお徳を
 くいの合裁お徳もよるうらなをひそめてお徳希のまでもらうらん流家とお徳を

時より室町へ仰りまゝと「余程おれは此の世の角がや一」^たと云ふも
口多のゆかりつまよふまての流程をせほひのききまんの例に「此の世も
ゆのさくらや一」と減ぐまおれと娘のききまの無恥希もねもふらふきき
ぶんこいふゆりおわり「うりて「あやまらうとくそんあや減をこりすと程目よ
さうらうらふもふ返るさんなふく目と縁をまがうとあして居る「昔ねも
仰りねとあつまを洗ひものせ仕止まが昔ねとありまよと世作とやき武
人おまん中とたぐ「さやる目後もできまきやう水とまきやるのと目も昔
らうら夕疎こぶらう山の宿にお終と引連とゆらとお終の大悦とを脱く
の物語り泣中や笑ふやうき顔お終がいらくとある致無恥希も泊る積
りて「居るお終の言ふお氣もたう「昔老志布りの湯うこ「黒橋子たふ
寸位の中のせま死帯「と驚ふお「おんさあして毛巻のきき九とけ
ぶとふの指お終の病人のいと致あはさびのうら「抱き志布りの縁惟

子無麻の子の帯とめて好やの内へ運入お終の無恥希とを無理ふお終が
好やの内へ入る白くいの 次の方へ麻もも琴の作通るれまといか
「「居るお終も「物無恥希の好やの内へ螢の居るふあを麻とらんぐ
居て居るお終の刷めて多葉彩を吸身て無恥希「まやちと傍をこえか
してお終さんくとつまが噂お終が次の居るあてゆと無恥希「いつまを
よんで「兼とつ持てまてなりやそ「とあれとんご目小「さやる「ゆと
「ゆとありてまの縁をよゑて居るとりゆ極る目よ合身と「るせを
合身「なせとしふらがぬものう十二の時う「言号と「とあれがゆの
あやあはるこのもやくで流世の美程小「落てられらうとや「あさたまの
ふ持で仕止まをてあれも縁をよゑたれども美をさるるうら「言号ゆら
たうらゆ「極るをや「とさるる極る「ゆの上をたふらゆもあまのせんの上り
ねがもえたとつよりねがも「とんごゆのさしゆせ「ゆめ「止おた「極る

そんなので移し目が多しものせいの巻そのまは折角無事なりうけてらん
なるので終るぬどろをきつたりとてきこひものぞ何よふなり終
まりお希きんと悪く泣くと泣止しまがらなくぬましとお目たうう
つての事おぬもせうよんを意なりこつ上りぬましアお業と上りま
せうをしてお火もよういけてお掬例へてまましこそし湯もこのけく
意来うしつてまよりちやせと云るういあつり入遠ひはお娘の業を
拵て好やの門へ出入り想さんお業をよりませううあんまり活きのむら
のどろかうくと云るがうまを吞でちあくおふおりやく司のふいよ
といわとお娘の業と吞て想よぬ業を想よき男いりうそんな
人の世宿斗りせむとありお子つ移るといりうがうもさたておも悪
いふまぬへう一あよ言へ痛るせくと引ある実はおれと夫婦は成て
ううふとんるお若号後一終りのうきと一は忘れぬぞ「新」

死でも忘れぬ波しせんがあまのたんのこがそんなうい終るよお思
ていふまうぬぞ久ね町三指多付く女房よといふのいどの人よりおふ
物ありと世物よ身帯と付て有さまさう今中を女房男もは山に
たり末いあかまの女房よ志よのといつていふもそとあゆまもそと知
ぬら女房よお業おしとめてまを先り承承たりまらるのさ此の端のな
んぞお業でも人の女房よいあし終り身の上おんの世ひおまぶうううう
氣まづつとあつてられりよ男のこあぢとるひま幾たりあふのうら
ととも何のあることとあひ来おうくとるぬぬこれ悪申とふしては
明がくし終たりく明る秋の晴きお娘の命の終飯と喰て帰しき内あ三
隣りゆりなるまかお娘さんお参の誓おと余うせぬ拵中とお娘の命
んと身帯をお娘の氣の毒お娘とたしお娘お娘お娘とさぬ拵
おつまう送りてふり中だうしおまを人女とまがいつとまもお娘の

りお徳と恨ごてのとうへ^ま二人りさんりあうあうと近の知徳とあつて
おらんるさまな夕アも由一ゆりてはくぐとお二人の殊の公お徳さんの
貞公よて今もそ徳さんよ速じ一君も是て世八の夕アの雲晴て公
の美髪もつた心太い大悪受とる先解様よ一方るぬは勇ま更其持の
勇まきつらうては徳よ何れも其丑儀一は我身と列上すつ大名の業一を
して日一の取便そよお徳さまあれむの取急のそよ一君もあつと
はねたうくあひひ一先解さま一節も其も一節はねたうとむつとせぬ
作製もとくつめひひ念仏耳りよて業一なふの身も引くて和
者りよ若ト酒呑粒多の人と呼集れて其数もそとそと一とあけ
くぬお徳さんよあつと速じ一和のふつと心無我子とる振る人子
かり保たうと及とやがり何といひつけと無身の上はあふんと改めはたこ入
ますお徳さんも今もそ通り室のふとあくの持とぬぞは未承く徳次

和さんと大切よ成事を徳さんとお徳さんの貞公とあつとすつ尼控ぬ
振よたをそといつあへりつと知徳が包と垂一髪をおろしつらといふ
身を感念よあつと改めて其跡の石刻其志あつと候と一とあつよし
想ひつお徳さま下産着く下りつる程なく入来るハ七十余の白髪祝
又髪ハあつとさのう法の新長甲一と産あ通り一清茶分の作ふか
法どのふ照くの取急言とあつと尼と成れぬ法神妙と心は解様も
いり斗り取候しとて付是ハ男の持よ位りされ名を若呂院と下される由
原もき位よ知徳の多産減よくれつる想とつとお徳もともく候じて其志
あつと移投とる望あつとつお徳次が教とほくくそと物もくせの中
よあや危かまろつとつ振振より想とものふあじと心い一は年よあり
徳よよくもう徳と心い一つとつる老やまを射ても心いおふんうく
左トいといふ時知徳を望あつとつとの和とた振りよとるやとたづぬ

と申す酒沼うじは若くつゝ誠とてお細う誠とてお入らぬと改ておら
とのれきりてち又おれまふくお細うとむりまじく子孫繁栄業は
振やとわらく欲ひまが不都合久ね町のね板を昔き清方(行て修
の物残りとして昔き清方お細う若氣の徳りよてお苗とぬておま
をして大志更し一程と捨てるふ者志と誓りし後五女もいふるれ
ども世な我子先んどのお苗のゆら一まふされ表向よりお子の名業
を昔のぬりよぬりさる振と修くの程よ二女も昔き清方もいふの上
より育て上てるお細うがここのつゝ女房のむさう一なる子なり
一に程まゝお細うのつて娘と云ふ号もて改し一立て身まくりしと改彼是
と云け合原もきり改昔き清方もお東業知して昔次市お方一も能く
云きくせつあつ流お明して不都合あつゆも別合お方大に欲ひも
別るあつあぬりよして昔次市が娘よお入らつゝ孫娘とまをまを

してお細うとお細うまゝ実を昔次市始て安を感へ入我より一自
てお細うのお細うをさうけしゆるを知らくゆふお入ら東業昔き清
も欲ひもり不都合も投投として安らつゝ孫娘の民まが目拍をぬく
昔次市(娘)後入をまやつ家の欲ひの年りよし不都合市あつ山の
富へあつふよく昔次市として是もり拍をぬく表向かお細う呼道
くお細う一不都合町の系系も表向名かお細う姉のお細うが子あ
るゆふと主人とゆ一不男の若むと若き清として系系の若き子
しお細うの上お細う送りこし又不都合の布店一も久ね町の昔き清方
よりゆきと一送り下しゆるをまふお細う下してゆ廣く帯^{おひ}不
し日く不都合一ゆらゆ久ね町ゆも表向かお細うを改て改て改めく
昔き清方不地面三つゆをけてやり又昔次市の嫁よお細うも徳
改お細うもかゝぬきりゆ改昔次市も別して悦いお方も今昔を

此五箇の惣括りたる夫婦の心算をかんと、實をうくふり、此のゆゑ
年月をまわぬる間、惣括りと大切なり。又お後が子あかみ、富所の
あるト、娘を息をたうく致し、惣括りもお後と大切とする。惣括りも
お後とおりの、いさゝか致せの中も、集くと送るを内、惣括り方めと
玉の括るる男子あかみ、ある定法夫の、よくわたり、娘のをり、よく
二女を成く、夫婦の志、その内、玉と息、これ母伝女、と育ち、かろ
又久松町の吾郎、くさうも、お後と女子あかみ、と息も、惣括りあかみの
縁とし、吾郎清と惣括り、と世の中、のゆい、惣括り、吾郎清、と打佐や、惣
括り、か子と惣括り、と名付、吾郎清、娘、あかみ、といひ、夫婦の縁、きき、お
後、中より、未、惣括り、の、いさゝか、いさゝか、と、ある、ゆい、お後、の、お後、と、惣括り、
が、男、惣括り、と、いさゝか、として、久松町の、縁、と、いさゝか、せん、と、お後、の、お
後、く、いさゝか、惣括り、とお後、と、わら、大切、と、ちり、いさゝか、又、お後、の、お
後、
お後、の、お後、お後、が、妹、のお後、を、嫁、に、貰、ひ、是、も、お後、と、く、男
子、あかみ、して、久松町、と、富所、と、わら、あかみ、と、三方、金、婚、の、と、く、大、惣括り、
の、と、く、あかみ、未、惣括り、として、お後、あかみ、歳、と、あかみ、あかみ、この、お後、
と、あかみ、れ

江戸集 大尾

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The handwriting is dense and fills most of the page.

Handwritten characters in the top left corner, possibly a page number or a reference mark.

Handwritten characters in the bottom right corner, possibly a page number or a reference mark.

